

日本教育保健学会
2021-2022 年度 共同研究

テーマ：教育保健学的な視点からみた学校の存在意義に関する研究

研究期間：2021・2022 年度

趣 旨：

子どものいじめ、不登校、暴力、自殺が問題視されて久しい。これらは、競争主義により生じるプレッシャーの他人への転嫁が“いじめ”，プレッシャーからの忌避が“不登校”，プレッシャーへの攻撃が“校内暴力”，プレッシャーを感じる自己の破壊が“自殺”とも解釈されている（世取山洋介氏による第15回日本教育保健学会特別講演）。また，第4・5回国連子どもの権利委員会最終所見において，「社会の競争的な性格により子ども時代と発達が悪されることなく，子どもがその子ども時代を享受することを確保するための措置を取ること」（パラグラフ20（a））が勧告される所以でもある。すなわち，学校を含む社会が子どもを追い込んでいるのが日本の現状というのが国際社会の評価といえる。

一方で，新型コロナウイルスの世界的流行は世界中の人々の生活を一変させた。日本の子どもたちも例外ではない。多くの地域で，2020年3月上旬から突然の臨時休校を余儀なくされた。その後，分散登校を経て学校が再開されたのは6月上旬のことであった。再開当時の学校では，およそ3ヵ月ぶりの学校に大喜びする子どもたちの笑顔が溢れたという。保健室登校や不登校の子どもたちが登校したとの話も聞く。また，このような様子は，東日本大震災後の学校でも同様であったという。未曾有の緊急事態下においてさえ，学校再開を待ち望んでいた子どもたちを想像すると，その健気さ，逞しさに胸を打たれる想いである。ところが，従来通りとはいかないまでも，学校が徐々に「正常化」していくにつれて次第に子どもたちの笑顔が少なくなってきたとも聞く。本来，子どもが大好きな学校から子どもの笑顔が消え，冒頭のような問題事象が発生するのはどうしてなのだろうか。そもそも，教育保健学的な学校の存在意義とは何なのだろうか。

以上のことから，2021-22年度共同研究では「教育保健学的な視点からみた学校の存在意義」を検討する。具体的には，1）（コロナ禍が続く窮屈な日常等からみえてくる）学校生活が子どもに及ぼす教育保健学的意義の検討（実態調査），2）保健室登校，不登校の子どもを対象とした実践の効果検証（実践研究）に関する研究を推進していきたい。

研究メンバーの募集：2021年7月末締切

※日本教育保健学会の会員であれば，どなたでも参加できます。

応募先：野井真吾（日本体育大学，日本教育保健学会研究委員長）e-mail：nois@nittai.ac.jp

第1回共同研究会議：2021年8月7日（土）13～15時，場所：zoom（URLは後日配信）

研究予算の使途：報告書の作成，会議費，講師費等。なお，原則として旅費は支給しない。

以 上